

記念公演

ニューヨークにおける精神保健リハビリテーションサービスの改革 ～当事者であり行政サービス責任者である視点から～

ユミコ・イクタ（ニューヨーク市健康・精神衛生部 リハビリテーションプログラム ディレクター）
座長：高橋清久（公益財団法人精神・神経科学振興財団）

第6回を迎えるリカバリー全国フォーラムのメインテーマは「リカバリー志向サービスへの転換」であり、昨年のテーマを継承しました。副題も昨年同様、当事者参加による社会的意思決定であり、今年はそのパート2ということになります。

記念講演の講師のユミコ・イクタさんは日系二世。父親の仕事の関係でニューヨークに移り住んだ後に誕生し、日本とアメリカの二つの国籍をもっています。二度にわたるうつ病エピソードを乗り越えて、現在はニューヨーク市健康・精神衛生部リハビリテーションプログラムのディレクターを勤めています。

講演は日本語で書いた原稿を読むという形で行われ、講演後の質疑応答は、質問を久永さんが英訳し、イクタさんは日本語で答えるというやり方で行われました。若干たどたどしい部分はありましたが、懸命に日本語を話そうという誠実な姿勢に満席の聴衆はひきこまれていました。

ニューヨーク市では様々なリハビリテーションプログラムを持っていますが、イクタさんが特徴的なものとしてあげたのは、救急対応・援助つき移行・援助つき雇用の3点でした。

救急対応は入院に替わるものを提供することで、危機的な状況にある人を穏やかに着地させることからパラシュートと呼ばれているそうです。クライシスレスパイトセンターがその主役のようです。援助つき移行ではピアブリッジャーが活躍しています。ピアが病院と地域の懸け橋になるという意味です。援助つき雇用は18ものプログラムを駆使して行われているとのことでした。

ニューヨーク市では、貧困者向けの国の資金であるメディケイドを使って多くのプログラムを展開していますが、来年度から自律的意思決定ケアを試験的に行うということです。当事者個々人がメディケイドからお金を受け取り、自分自身の計画で、自分のリカバリー目標を実現するために意思決定をすることができるという試みは、昨年の記念講演でアーミー・マウラさんが話された内容とほぼ同じものでした。アメリカではピアの自律性を促そうとする試みがどんどん広がっている様子が伺い知れました。そのような活動の中心にいるのがピアスペシャリストで、ニューヨーク市ではピアスペシャリスト職の拡充を図って多額の予算を投じているそうです。

聴衆の皆さんは、そういう時代が日本にもくることを夢見ながらイクタさんの講演に聞き入っていたのではないのでしょうか。

《高橋清久（公益財団法人精神・神経科学振興財団）》